

<書評>大越嘉七著「井伏鱒二の文学」

里原, 昭

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

127

(終了ページ / End Page)

131

(発行年 / Year)

1981-02-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019311>

大越嘉七著 「井伏鱒二の文学」

里原 昭

著者は、「まえがき」の末尾で、井伏文学について、『私をして言わしめれば、「岩屋」の認識から出発した井伏鱒二の文学は、「人間の大地の思想による「拒否」の眞実性^{リアリティ}において文学史上残り得るものだと思ふのである。』と記しているが、この発言は、自らの存在をかけて対象化（井伏鱒二の作品世界における文学精神の構造と、現実認識の構造を明らかにし評価する）してきた到達点といえよう。

次に到達点に至る内容を著書の構成にそつて記し若干の考察を試みる。

「井伏文学」の象徴——『山椒魚』——

一、岩屋の規定、二、人間存在の象徴（昭和三十八年十月発表）

井伏鱒二と論理性——鑑賞の客観性とは何か——

（昭和三十八年二月九日発表）

『まごなみ軍記』論——井伏鱒二の認識構造——一、成立事情

二、構成の特徴 三、人間認識の方法（認識構造） 構造四、人

間的可能性（普遍的人間性）（昭和三十九年三月）

井伏鱒二と抵抗文学——『鐘供養の日』『遙拝隊長』——

（昭和三十九年九月）

『黒い雨』論——原爆文学とリアリズム——

一、『黒い雨』論の課題 二、改題の必然性——構成と展開——

三、『平常心』とは何か——「大現実」の尊重——四、『悪写実』

とは何か——「存在」のリアリズム——五、人間の大地——井伏文

学における人間観と「拒否」のリアリティー——六、原爆文学と

しての問題

（昭和五十四年十二月）

「到達点」へ到る論文内容は発表の時期で二分できる。昭和三十

八、九年に書かれたものを基本的な著者の文学方法の形成とみて、

『黒い雨』論はその発展として位置づけられよう。

『寒いほど独りぼっち』の孤独な精神が山椒魚は悲しんだ。」という針の穴から流れ込み、堅固な「岩屋」の世界の中で、自由と安定感（論理性・文学的真実性）を得ることができたとき、井伏文学は誕生したのである。（二二頁）と記し、著者は、「岩屋」の世界に生きる人間（『山椒魚』と『蛙』）の重い存在と、その中からの人間認識を井伏文学の原点であると規定している。そして、『堅固な「岩屋」をもって「山椒魚」の世界を浮彫りにして見せたとき、井伏鱒二は「自己の生きる態度の根底に深い自信」を得、「稀に見る思想的作家」として誕生したのである。いまや「岩屋」の変らぬ維持のみが、井伏文学の世界を豊かなものとする可能性を約束する。（二七頁）と結論している。

又著者は『稀に見る思想的作家』と規定する評価の前提として、『鑑賞の客観性とは何か』の中で、『文学作品理解において（その鑑賞においても）、「事実」はその文章（作品）独自のものでありその形象された内容（主題・思想）にとらわれないという意味の客観性・論理性・科学性（没価値性）など考えてみても無意味だ』（三八一―三九頁）と記し、『作品は常に合理的・科学的な計算の上に展開されている。合理性・科学性・論理性は、井伏文学に一貫している』（四六頁）と判断している。

この点から著者は自らの文学方法による井伏文学の作品世界の発展の極北に、「人間の大地」の思想へ発展する必然性を予知していたのではないかと考える。その事は一定の評価のある『さざなみ軍

記』論の「論」の底流の基調の一つとなっているのではないかと思う。著者は、三、人間認識の方法（認識構造）の中で主人公は「落ちのびて行くよりほかない」戦いの敗者（逃亡者）として、目的も希望も喪失し、無意味な戦いの中に兵の住く路を失う。武士からの精神的逃亡において人間の悲しみの世界を発見するのである。作者は、戦いから、また武士本来の姿からの孤立者（墮落者）において人間的な姿をみ、その敗者（主人公）に、歴史からも階級からも思想からも、また現実の様々な制度や規則や桎梏からも解放された、公平な人間的に真実な批判者の資格をみているのである。（七一頁）と記し、「岩屋」の規定を前提とした人間認識の方法を定着させている。

即ち、『戦争（「岩屋」）によって強制（規定）されて生きる人間の姿——強制されることによってその存在を運命づけられてきたという意味での歴史的人間の姿（庶民の典型）』が、『山椒魚』以来のこの作者の人間認識の象徴的表現』であるとし、『規定されることによって存在する人間（対象）、その被対象を見出した時、作者の想像力はみごとに開花する。そして、その規定（制約）が厳しければ厳しいほど、その規定の中で、自己を実現する精神の自由もまた大なのである。これが、この作者の歴史小説の、さらには人間認識の基本的発想法（認識構造）である。』（以上七五頁）と著者は結論している。

又、四、人間的可能性（普遍的人間性）の中で、更なる論の展開を提示し、『井伏の認識構造の真実性はほかならぬ現実凝視の確かさ

を意味し、(略) いわば零の地点(「虚無の洞穴」)に立つことなく、悲しく堪えて生き抜く人間(民衆)の可能性に対する信頼を可能にした(八三頁)としている。

『井伏鱒二と抵抗文学』論はその論旨を作家井伏自身の戦争体験をも論理の対象として分析し、『遙拝隊長』をささえている作者の精神構造について『岩屋』の変らぬ維持のみが、井伏鱒二の作品世界(詩的眞実性)を保証する所以であり、この詩的眞実性の保証のないところに、文学的抵抗もあり得ないのではないか。井伏鱒二の文学的抵抗の実態とは、その戦争体験(検証)によっても変ることなき人間認識のパターンそのものの強さ(眞実性)である(二〇〇頁)と、井伏鱒二の文学精神——『岩屋』の規定による人間認識の強固さを著者は主張している。

以上は、著者が、昭和三十八、九年に発表した論文で提起している主要な内容であるが、それらは、井伏文学の作品世界、その世界をささえている文学精神を、その世界そのものから具体的に説明する方法を、一貫して追究してきたと言える。

著者は、井伏文学の根源にあるものを理論化し、抽象化する作業の困難さの中で、独自の方法(『岩屋』の規定。人間認識の方法。普遍的人間性の発見)で、井伏文学の本質を把握する方法を形成し得たのである。

そして十六年後に、『井伏文学の本質が変わらないように、基本的

な見方は変わらないにしても、より永い時の流れ(歴史)と人間存在のより深い認識の意味を考えることにより、もっと積極的な見方や評価が文学的視野からも必要ではないか(二九五頁)として、『黒い雨』論の構築へ進んでいる。

『黒い雨』論で著者は、『岩屋』の規定を軸に出発した井伏文学の本質(井伏鱒二の全存在)に迫っている。即ち、まるごとの作品『黒い雨』の作品世界(形象)そのものの綿密な分析と評価を、作品世界そのものに即してなし、その作品世界をささえている文学精神と論理そのものに厳しく迫る中から、著者は現代に生きる自らの文学(研究)姿勢をも厳しく問うている。

著者は—構成と展開—の中で、『姪の結婚』は作品のモチーフであり、結果的にはあるが具体的な日常的な現実から巨大な原爆の世界への接近の具体的な入口である。矢須子の不幸な運命は、その展開が必然的に過去の被爆の記録を要求し、それは同時に超非人間的な原爆の現実、存在の本質が記録の形式による形象を要求したことから、重松の願いに支えられ、それが人間的日常的な現実との絆としてそれを縫い取る糸の役目を果している。(二二四頁)と述べ、主人公重松は『絶対的な被害者「無辜の民」の悲しい人間的現実を超非人間的な「原爆」の本質に對置する役でもある。これは個人の世帯やドラマを超えた世界を創造する構造を持つのである。(二二八頁)と分析している。

そして更に著者は、『事実や記録を尊重する精神は……単なる事実や記録の尊重による現実の再現ではなく、まさに「仮作られた」文学的な“大現実”の尊重を意味するということである。これは個の世界ではなく存在の世界であり、存在自身が語る世界である。その存在(対象)対象に如何なる真実を語らせるか、そのためには事実を尊重して事実にとらわれることのない、作者の鞏固な認識と精神の自由の保障が前提であり、その確保がないと想像的な対象への肉迫もまた保障されないのである。』(二三八頁)と書く。この発想は又、

「大現実の尊重」を前提として「黒い雨」(原爆)の超非人間的な本質の問題を考察する著者の思想の立脚点と重なり把握される。著者は超非人間的な原爆の悲惨に対置された人間の歴史と存在と運命を賭けた強靱な精神の創造を主張しているのだ。そして、その「創造の極北」に著者は、『共通の運命を担いながら、厳しく苛酷な現実の中で、同じ大地を踏みしめ、互に「犠牲者」として堪えて生き続けなければならないものの試練』を見て、『この悲しい「犠牲」の集積が生きる知恵を生み、その歴史は互いの頼るべき暖く鞏固な人間の大地を創り出していく。(以上一五三頁)と結論している。そして、『人間の大地』を創り出す営みは、この「大地」の正常を掻き乱す異常を拒否する本性を持っている。』(一五四頁)と規定し、「人間の大地」からの「拒否」の真実性の存在を発想として定着させている。

『——おお蛆虫よ、我が友よ……もう一つ、こんなのを思い出し

た。——天よ、裂けよ。地は燃えよ。人は、死ぬ死ぬ。何という感
激だ、何という壮観だ……——との或る詩人の詩句に対して「許せ
ないぞ。何が壮観だ、何が我が友だ」(一八〇頁)と作品世界の「僕」
のことばに著者は自らの思想をも重ねて、『苦しい』とか「悲し
い」とか「人間らしく生きたい」とかいう言葉では最早表現できな
いもの、それほどの超非人間的な「異常」さを、人間の大地を信
じ、「人間らしく」のみがその生の自然である「正常」な人間——
被害者・犠牲者として運命づけられた人間が、存在そのものを賭け
て拒否した姿である。それ以外の拒否は有り得ぬ「拒否」である。

人間の自然、人間の大地からの爆発的な抗議である。』(一八二頁)
と、井伏文学の本質に迫っている。即ち、『存在のリアリズムは、
「人間の大地」のリアリズムでもある』(一八四頁)と結論し、井伏
鱒二の作家的位置について、『被爆日記』の清書を完了した翌日の
午後、昭和二十五年八月五日のことである。ここには確実に、人類
がなおそれを十分に克服する手だてを持たぬ致命的な疾患と知りな
がら、ほかならぬ全き人間的なるものによって、超非人間的な原爆
の悲惨の前にも決して絶望することなく、あくまで挫けること、な
く、死の側に立つ人間としてではなく常に「犠牲者」の生命の側に
立つ人間として、悲しみを堪え「人間の大地」を信じて生き伸びる
道を追究し続けようとする作家井伏鱒二がいる。』(二二二頁)と記
し、『黒い雨』のもつリアリティは「非日常性のなかに日常性を」
捉えたというより、超非人間的な「原爆」に対して犠牲者の「人間

の大地」を創造したところにある。「人間の大地」からの「拒否」がもつリアリティにその真髓がある。』（二三三頁）と結論し、井伏鱒二を「人間の大地」の思想を持った作家であると規定している。

◆本稿は依頼枚数の二倍に近く、時間的に書き直し不能であるため、書評としては異例の長さのまま掲載しました。
なお、会員で著書刊行の際は編集部宛御送り下さい。——編集部◆

『井伏鱒二の文学』は、著者の「思想化された人間の体験」（戦争体験、戦後体験）が、著者の文学精神（『井伏の作品は好きであるが、それだけ厳しく突き放したいという気持があった。そのためには作品世界の形象そのものを厳しく尊重することだ』—著者自評—）と、現実認識によって、「人間の大地」の思想として自立し確立され、具体的な文学のイメージを持ったものになり、その自立した思想（文学方法）を通して、「奇妙な複合体の世界」として一側面しか捉えられないと言われている井伏文学を、その全存在を視野に入れ、その作品世界の広がり全体を把握し得る主張として提起されている。又その線上で、この著者の文学方法は新しい「井伏鱒二文学論」構築への端緒を明示し、著者の厳しく、激しい文学精神を顕在化させている。

尚、巻末には「作品年譜」「著書目録」「参考文献目録」があり、井伏文学を研究対象とする者にとっては様々な手掛りを得ることが可能な整理がなされてある。

「井伏鱒二の文学」法政大学出版局刊

二九六頁・定価二〇〇〇円

（一九八〇年十一月二七日）